

國學院大學学術情報リポジトリ

ギラルドゥス・カンブレシスの帰属意識

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001042

ギラルドゥス・カンブレシスの帰属意識

■ 永井 一郎

▶ 要 旨

本稿の目的は、ギラルドゥス・カンブレシスがどのような帰属意識をもっていたか、彼の著作から探ることにある。

ギラルドゥスの生涯を概観すると、帰属意識をもっていたと思われる場が3つ浮かび上がる。親・兄弟を中心とする親族、ウェールズ南部の聖界を支配していたセント・デイヴィズ教会、郷土のウェールズ南西部である。このほかに、一時期彼はイングランド王宮に強い期待をかけていたが、王宮に対する彼の認識は帰属先というよりも戦いの場であった。

検討の結果次の結論が得られた。ギラルドゥスは、南西ウェールズを郷土とするが、出自、活動いずれの面でもまずはアングロ・ノルマン人であると認識していた。ただ、彼は郷土を中心としたウェールズについてよく知っており、ウェールズ王家の血統を部分的に受け継いでいたから、ウェールズに対して強い親近感をもっており、その意味でウェールズの人と自認することができた。

先行拙稿で明らかにしたように、彼はこうした帰属意識とは別に、自分を取り巻く状況に応じて政治的なスタンスをつくりだし、顯示したが、そのスタンスは、彼が二元的出自をもっていたこともあって、自身の帰属意識としばしば矛盾した。矛盾は最終的にイングランド王宮との対決として現実化し、敗れた彼は帰属先をすべて失ってしまった。

▶ キーワード

ギラルドゥス・カンブレシス 帰属意識 セント・デイヴィズ教会 12世紀後半のウェールズ

目次

- I はじめに
- II 親族
- III セント・デイヴィズ教会
- IV 郷土ウェールズ
- V おわりに

I はじめに

本稿の目的は、ギラルドゥス・カンブレンシス（Giraldus Cambrensis, 本名 Giraldus de Barri）がその活動期（1170 年代～1200 年代前半）にどのような帰属意識をもっていたか、彼の著作から探ることにある。

ギラルドゥスの系譜や活動を見ると、彼がウェールズと深くかかわっていたこと、その意味でウェールズの人であったことは間違いない。12 世紀中葉に南西ウェールズで生まれ育ち、4 分の 1 ではあるが古いウェールズ王家の血統をひき、南ウェールズに広がるセント・デイヴィズ司教区で晩年まで活躍しているからである。また、彼自身が「ウェールズのギラルドゥス（Giraldus Cambrensis）」という通称を受け入れている、自ら使用した可能性もある⁽¹⁾。こうした点を重ね合わせると、ギラルドゥスは自分をウェールズ人と認識していたと判断してもよさそうである。20 世紀後半にウェールズで出版された啓蒙的な歴史書は、いずれも彼をウェールズの偉人と称え、ウェールズに関する彼の 2 つの著作『ウェールズ旅行記（Itinerarium Kambriae）』⁽²⁾と『ウェールズ案内（Descriptio Kmbriae）』⁽³⁾がウェールズ人必読の古典と見なされているのも自然に見える。

もしこの判断が正しければ、本稿でギラルドゥスの帰属意識を検討する必要はなくなる。しかし、より細かく見ると状況はこれほど単純ではない。複雑になる第 1 の理由は、彼がアングロ・ノルマン貴族の血統を併せもち、イングランド王に認められて昇進していったことにあり、第 2 に、同時代のウェールズ人・社会に対する彼の評価に大きなばらつきがあって、ウェールズ人という自覚があればこれほど酷評するだろうかという疑問が生じる場合が少なくないからである。第 1 の理由、すなわち、出自の二元性はよく知られた事実であり、後に本稿でも紹介する。また、第 2 の疑問は先行拙稿で繰り返し取り上げており⁽⁴⁾、ここでは最も分かりやすい事例、『ウェールズ案内』末尾の 3 章に記されている矛盾含みの提案を紹介すれば充分であろう。

『ウェールズ案内』第 2 巻第 8 章は「どのようにすればこの民族〔ウェールズ人〕を征服できるか」と題され、効果的な作戦や戦術が説かれている⁽⁵⁾。続く第 9 章は「征服後、〔ウェールズを〕どのように統治すべきか」と題され、ウェールズ人の弱点を利用する具体的な提案がなされている⁽⁶⁾。さらに、全ウェールズ人の追放という案まで紹介されている⁽⁷⁾。

この 2 つの章でギラルドゥスは明確に征服者側、すなわち、イングランド王権の側に立って発言しており、ウェールズ人に対する共感はいっさい見せていない。

しかし、第10章になると彼の姿勢は一転し、「[ウェールズ人は]どのようにすれば彼ら[イングランド勢力]に反撃し、抵抗し続けられるか」述べている⁽⁸⁾。ひとりの君主の下に勢力を結集すれば、ウェールズ人は国を充分守ることができるというのである⁽⁹⁾。

ここでギラルドゥスはウェールズ人の独立を願う立場から前の2章の提案と矛盾した発言をしている。もし彼が両勢力から距離を置いて、まったくの第三者として発言しているのであれば、無責任のそしりは免れないが、こうした発言をする可能性もあろう。しかし、上記のように彼は両勢力と深くかかわっており、その発言は人々の口を通じて両勢力に伝わる位置にいた。無責任な発言をすると身を滅ぼしかねない立場だったのである。彼はなぜこのような記述を同じ著作の末尾に置いたのか。

私は10年あまり前にこの疑問を抱えてギラルドゥスの著作を読み始めたのであるが、まだ納得できる答えを見つけていない⁽¹⁰⁾。当初私は彼の記述を丹念に読めば疑問は解消するだろうと考え、手がかりになると思われる記述を検討してみたが、はかばかしい結果を得られなかった。私が採ったのは、彼の記述を文字どおりに受け止めてひとつひとつ親ウェールズ的であるか親イングランド的であるか判定し、そこから彼の帰属意識を推定するという方法である。これは簡便で、まずは試みるべき方法であるが、記述自体が矛盾している場合には役立たない。実際、私の試みは疑問を深めるだけに終わった。

では、ギラルドゥスが矛盾を含む記述をした理由を探るにはどのようにすればよいのか。私は、彼が二元的出自をもち、それを生かしてイングランド王宮とウェールズ人勢力との仲介役をしていたことを踏まえて、彼は活動の時期や場に応じて自分の政治的スタンスを変えたのではないか、その変化が著作に反映しているのではないかという仮説を立てた。職務遂行に際してギラルドゥスは常に自分の政治的スタンスを意識していたはずであり、場合によっては自分の真意とは別のスタンスを採る、あるいは、採って見せることも覚悟していたのではないか。イングランド側、ウェールズ人側の人々も彼の行動の中立性を注意深く見守っていたはずで、この点を彼はよく意識し、逆に利用しようとした可能性もある、と考えたのである。

この仮説を念頭に置いて、私はギラルドゥスの生涯をいくつかの時期に分け、それぞれの時期に彼がどのような政治的状況に身を置いていたか、その状況をどのように利用して自分の課題ないし目標を達成しようとしたか具体的に探ってみた。探索に際して私は次の3点を重視した。

第1は、彼が聖職に就いた時から晩年まで一貫してウェールズで最も高い権威をもつ故郷のセント・デイヴィズ(St. David's)教会で司教となる夢を追い、そのためにいろいろな方策を巡らし、努力を惜しまなかったという事実である。

第2は、彼がセント・デイヴィズ教会メンバーによって司教候補に推された時に、司教

任命権をもつ主君ヘンリ二世が彼を拒否し、しかも、その理由が彼はウェールズ人であるという王の決めつけにあったという事実である。ギラルドゥスはこれまでと別の方策を案出する必要に迫られたはずで、私はこの時から彼は自分の政治的スタンスについていろいろ工夫するようになったと考えている。

第3は、彼が工夫の一環としてその時々著作を自分のスタンスを表明する場として利用したのではないかという推定である。この推定が誤っていなければ、ある著作が書かれた時期に彼が身を置いていた政治状況から記述に込めた彼の意図を推測する手がかりが得られる。

以上のように考えて私はこれまで『アイルランド地誌 (Topographia Hibernica)』⁽¹¹⁾、『アイルランド征服 (Expugnatio Hibernica)』⁽¹²⁾、『ウェールズ旅行記』を読み、それぞれの執筆時期に彼が採っていた政治的スタンスを検討した。その結果、彼のスタンス、特にイングランド王に対するスタンスが3著作の構想・執筆時期で順次変化する様子が浮かび上がってきた⁽¹³⁾。

ギラルドゥスの帰属意識をテーマとする本稿も同様な発想をもっている。一般的に帰属意識は生涯を通じて安定しており、時期による変化が問題になることは少ない。しかし、ギラルドゥスのように二元的な出自や活躍の場をもっていた人の場合は、いくつかの帰属意識をもち、状況によってその比重や組み合わせを変えた可能性がある。かつて私は彼の自己認識について検討したことがあるのだが⁽¹⁴⁾、その時は帰属意識の可変性を無視していた。したがって、本稿で改めて彼の帰属意識を検討する余地があり、直ちに長年の疑問が解消するとは思えないが、何か新しい手がかりが得られるだろうと考えたのである。

ここで、帰属意識に関する私の理解を簡単に説明しておこう。

- (1) 私の考える帰属意識とは、人がある特定の人間集団ないし場について、ここが自分の身の置き所だといった安心感をもち、そうした感覚が常態化して生まれる意識である。通常、人はこうした帰属意識を複数もっている。
- (2) 帰属意識は、常態化しているとはいえ人間の感覚に根ざしているものであるから、状況に応じて多少とも変化し、それにともなって他の帰属意識との関係も変わりうる。むしろその時々状況にふさわしい帰属意識の組み合わせやバランスをつくり、安心感を確保しようとするのが普通である。
- (3) 人は、何らかの目的をもってある帰属意識だけを強調し、それを自分の政治的スタンスとして表明することがある。この場合、表明された帰属意識は彼の真意を正確に表していないことに留意すべきである。

以上の3点は時代の差を無視した一般的な表現になっている。ギラルドゥスの帰属意識を問題とするのであれば、まず中世特有の帰属意識を概念化し、それを手掛かりに史料を

読むべきかもしれない。しかし、現在の私にはその準備ができていない。そこで、現代に生きる私が最も自然に感じる帰属意識を入口として具体的に検討を始め、いくつか試論をかさねながら中世人に特徴的な諸要素を追求することにした。

このような理解に大きな誤りがなしとして、問題はギラルドゥスの帰属意識をどのように探索するかである。私は本節末尾に記す彼の主要な著作6点を読み、次の4点について彼の意識を検討することにした。なお、この作業はその時々には彼が身を置いていた状況を説明しながら進めるべきであるが、彼の生涯はこれまでいくつかの拙稿で紹介しているので本稿では省略し⁽¹⁵⁾、そこで得られた結論のみを利用する。

ギラルドゥスもっていた、また、作りだした重要な人間関係ないし場は4つあった。

第1は彼の両親・兄弟を中心とした親族で、父方と母方双方の血縁関係者が検討の対象となる。彼は生涯を通じて血縁者との交流を保持していたから、帰属先の中で最も長期の、また、安定した場であった。

第2はセント・デイヴィズ教会とその主要なメンバーである。ギラルドゥスはこの教会の参事会員であり、同司教区の中でブレコン（Brecn）大助祭区を任されていた。また、彼はこの教会で司教となる夢を生涯を通じてもっていた。セント・デイヴィズ教会が彼にとって特別の場であったことは間違いない。

第3は彼の生育地であった南西ウェールズである。彼はこの地域を称える記述を多く残しており、故郷の風土に対して強い愛着をもっていた。

第4はイングランド王宮である。ギラルドゥスは1184年から94年までイングランド王宮でヘンリ二世とリチャード1世に仕え⁽¹⁶⁾、そのウェールズ政策を助けている。また、彼の前半生を代表するアイルランドとウェールズに関する著作はこの時期に執筆なし構想されている。生涯の中で華々しい時期であった⁽¹⁷⁾。しかし、王宮での体験は彼にとって決して満足すべきものではなく、自分の尽力に見合う報酬が得られなかったという思いを一生もち続けた。当初彼は王宮が強力な後ろ盾になってくれると期待したのであるが、実際には安心して身を寄せうる場とはならず、むしろ、緊張に満ちた戦いの場であった。したがって、ギラルドゥスがイングランド王宮に対して私の考える帰属意識をもっていたとは考え難い。

以上の判断を踏まえて、本稿は彼がもっていた重要な場のうちで第1から第3までを取り上げ、彼の帰属意識を検討する。ただし、王宮を無視して議論を進めるわけではない。彼が王宮、特にヘンリ二世に対してもっていた認識や感情は、彼の帰属意識の表明に深くかかわって重要であり、必要に応じて先行拙稿の結論を活用する⁽¹⁸⁾。

本稿が利用する史料を記す。いずれもギラルドゥスの著作である。

『アイルランド地誌』 第1版完成1187年か88年。第2版完成1189年。

『アイルランド征服』 第 1 版完成 1189 年。第 2 版完成 1190 年台。

『ウェールズ旅行記』 第 1 版発表 1191 年。第 2 版完成 1197 年。

『ウェールズ案内』 第 1 版発表 1194 年。

『君主の訓育 (De Principis Instructione)』⁽¹⁹⁾ 第 1 巻執筆 1190 年代前半。

『自叙伝 (De Rebus a se Gestis)』⁽²⁰⁾ 1208 年～16 年にかけて書き継がれた。

本稿は彼の活動期に焦点を絞っているので、『自叙伝』以外はすべてこの時期に書かれた版に限定した⁽²¹⁾。

II 親族

今日分かっているギラルドゥスの血縁者たちは本稿末尾の系譜図のようにまとめることができる。

まずこの系譜図を簡単に説明して、そこからどのようなことが言えるのか検討してみよう⁽²²⁾。

ギラルドゥスの父は、ペンブローク (Penbroke) 近くのマノルビエ (Manorbier) の城主、ウィリアム・ド・バリ (William de Barri) である。名前から分かるように父の出身地はカーディフ近郊のバリ (Barry) であり、ヘンリー一世のウェールズ侵攻に参加してこの地に拠点を築いたノルマン貴族であった。彼の妻はジェラルド・オヴ・ウィンザー (Gerald of Windsor) の娘アングハラッド (Angharad) で、ジェラルドは 12 世紀前半にペンブローク城主として南西ウェールズのイングランド勢力を統括していた。ウィリアムはおそらく結婚を機にマノルビエ城主にとりたてられたのであろう。父の家系は同じアングロ・ノルマン貴族でも、母の家系よりも地位が低かった。

ギラルドゥスの母アングハラッドは、父が上記のジェラルド、母がリース・アプ・テウドル (Rhys ap Tewdr) の娘ネスタ (Nesta) である。リースは南ウェールズの古い王家の再興者であったから、アングハラッドは南ウェールズで対峙する 2 大勢力の血統を引いていた。

こうした父母をもつギラルドゥスはアングロ・ノルマン貴族とウェールズ王家の血統を 3 対 1 の割合で受け継ぎ、12 世紀南ウェールズを代表する支配者たちと近親関係にあった。たとえば、ジェラルドの死後アングロ・ノルマン勢力の中核的存在であったモーリス・フィッツジェラルド (Maurice FitzGerald) やデイヴィッド・フィッツジェラルド (David FitzGerald) は伯父であり、南部ウェールズ人勢力をとまとめていたリース・アプ・グリ

フィズ (Rhys ap Gruffydd) は母のいとこであった。

ギラルドゥスには3人の兄、ウォルター (Walter de Barri)、フィリップ (Philip)、ロバート (Robert) がいたが、年長の異母兄ウォルターは早くなくなっただけで、ギラルドゥスから見れば実質的に3人兄弟であった⁽²³⁾。3人の兄はいずれも戦士として育てられ、聖職に就いたのは彼だけである。

教会改革を進めた聖職者にふさわしくギラルドゥスは子をもうけなかった。兄たちには何人か子供がいたと思われるが、名前が伝えられているのはフィリップの息子3人のみである。

本稿末尾の系譜図はよく利用されるものであるが、ウェールズ王家の3人やジェラルド・オヴ・ウィンザーなど有名な数人を除いて、情報源はもっぱらギラルドゥス自身の言及に基づいている。また、ギラルドゥスの系譜図としてみると、少なくとも2つの欠落があり、そこから彼の親族に対する評価を推測する手がかりが得られる。

ひとつはジェラルド・オヴ・ウィンザーの出自が記されていないことで、これはウェールズにとって彼が新来者であり、征服によって支配的地位に就いたからであろう。ギラルドゥスはこの点をよく承知しており、それとの対比で南ウェールズ王家にさかのぼる自分の血統を強調している可能性が高い。彼は、政治的な実力とは別に、古い、権威ある出自を高く評価しており、機会があればそれを顕示し、利用している。

もうひとつは父ウィリアムの出自がまったく記されていないことで、これもジェラルドと同様な事情を反映しているが、それだけでなく、ギラルドゥスが父方の血統について細かく語るまでもないと判断していた可能性がある。彼は、下で引用する史料 (2-2) が示すように、父がアングロ・ノルマン貴族の地位を獲得したのは比較的最近のことであり、祖父ジェラルドに比べて地位、実力ともに劣る新参者であることをよく知っていたからである。

実際、彼が父方よりも母方の親族を重視していたことは、『自叙伝』で彼が父と母を紹介している記述を比較すると明らかである。

(2-1) ダヴェッド (Dyfed) 海岸に位置し、ペンブローークから少し離れたところにあるマノルビエ城で生まれた私「ギラルドゥスは……高貴な血統を引いている。というのも〔私は〕、南ウェールズの君主であったリース・アップ・テウドルの娘である高名なネストの娘アングハラッドを母とし、優れた〔家柄の〕ウィリアム・ド・バリを父として、〔両者の〕正式結婚によって生を受けたからである⁽²⁴⁾。」

(2-2) カーディフの近くにバリと呼ばれる島がある。「南ウェールズ海岸に居住していたある高貴な一族がこの島の名を採って、……、バリと名乗ったが、後に姓をド・バリに〔変えた〕⁽²⁵⁾。」

では、ギラルドゥスは母方の2つの系譜、すなわち、ジェラルド・オヴ・ウィンザーにさかのぼる血統とリース・アプ・テウドルの血統のどちらを重視していたか。この点は彼の帰属意識に直結する問題である。(2-1)に言及されているのは後者であるが、これだけで彼がウェールズ王家の血統をより高く評価していたと即断できない。判断する前に、彼が2つの血統の親族とそれぞれどのような関係を保って生活していたのか、何か具体的な事実で確認しておく必要がある。

手がかりとなる事実はいくつか考えられるが、内容的に、また、時間的に最も強い関係をもつのは養育と教育の場であろう。この点についてギラルドゥスは、「私はアングロ[・ノルマン]人の間で養育され、付き合いをしてきた」と述べている⁽²⁶⁾。実際、彼がアングロ・ノルマン貴族であった父や伯父の保護を受けて成長したことは間違いない。たとえば、彼が聖職を目指したのは父の勧めによってであり、また、グロスターやパリで聖職者の教育を受けられたのは、母方の伯父でノルマン貴族のデイヴィッドのおかげであった。反対にギラルドゥスが同時期の南ウェールズ王家の人々と親しくまじわり、影響を受けたという言及はまったくない。沈黙からの推測は誤解の危険を伴うが、もし彼がリース・アプ・グリフィズの宮廷に親しく出入りし、何か特別の影響を受けていたならば、そのエピソードを王家の伝統と絡めて書き記したのではなかろうか⁽²⁷⁾。

もうひとつの手がかりは成人したギラルドゥスの相談先で、たとえば、何か重大な事態に遭遇した際に彼が意見を求め、親身になって考えてくれたのはもっぱら兄たちだったという事実である。2つ事例を挙げよう。

(2-3) 第1回パリ留学の後、ギラルドゥスはカンタベリー大司教の許しを得て南ウェールズ各地の教会改革に着手したが、これはしばしば地域の聖・俗支配者たちの既得権と衝突し、トラブルが生じた。たとえば、ラーン(Laugharne)教会で彼は退去しなければ殺すと脅かされたが、兄フィリップといとこのオド(Odo)の支援を得て、無事に任務を遂行できた⁽²⁸⁾。

(2-4) 1198年にセント・デイヴィズ司教ピーター(Peter)が死去すると、同教会はギラルドゥスを次期司教候補に推挙した。しかし、王ジョンはこの推挙を却下し、その情報を得た彼は数年前から温めていた新しい作戦を実行に移す決意をした。具体的に言えば、王の頭越しにローマ教皇に請願し、教皇の権限でギラルドゥスの司教就任とセント・デイヴィズ教会の大司教座昇進とを一挙に実現しようとする作戦である。イングランド王宮から見ればこれは王権の侵害であり、ギラルドゥスが反逆者と見なされることも予想された。彼もこの危険をよく承知しており、この点について兄フィリップの意見を求めた。

「このように[計画を]立てた後、私は兄を訪れた。フィリップは善良で慎重な男

であった。私は自分が「始めようとしている」旅について、また、その理由について……内密に伝えた。」聞き終わって、フィリップは次のように忠告してくれた。

「弟よ、お前が始めようとしているのは困難で苦勞の多い仕事だ。お前は、カンタベリー大司教だけではなく、王とイングランド全体を敵に回す「覚悟のように」見えるが、そうなれば、大変大きな犠牲を伴い、危険に満ちた仕事になるだろう。しかし、お前が神とセント・デイヴィズ教会の權威のために戦うのであれば、神がお前の事業を守ってくれるであろう⁽²⁹⁾。」

ギラルドゥスもフィリップも王の意向に反する行動がどれほど危険か知っていたから、二人の会話は重く真剣なものであった。彼は絶対に外へ漏れてはならない相談をしているわけで、それだけ兄を信頼していたのである。ギラルドゥスにとって最も親密で頼りになる人間関係が家族、成人後は特に兄であったと判断してよい。

ただし、彼は家族のみを頼りにして活動していたわけではない。出自に由来するものに限っても、彼はより広い人間関係をもっており、成人後はこの関係を積極的に利用している。具体的には、彼が「ジェラルド一族 (Geraldini)」と呼んでいる人々である。これはジェラルド・オヴ・ウィンザーを祖として血縁および婚姻関係によって結ばれた一族で、南ウェールズでイングランド勢力の中核を形成していた。さらに、彼らの一部はヘンリ二世のアイルランド征服で中心的な役割を果たし、アイルランド南東部にまで勢力を拡大していた。ギラルドゥスは1185年から86年にかけて王子ジョンの率いるアイルランド遠征に同行したが、その際彼が頼りにしたのは同地の「ジェラルド一族」であった。

ギラルドゥスがこの一族を誇るべき親族を誇りにしていたことは『アイルランド征服』の中で次のように称えていることから明らかである。

(2-5)「敵の最も奥深い城塞にまで攻め込むのは誰か。ジェラルド一族だ。

故郷を守護するのは誰か。ジェラルド一族だ。

敵が恐れるのは誰か。ジェラルド一族だ⁽³⁰⁾。」

この賛歌については少し説明が必要であろう⁽³¹⁾。『アイルランド征服』第2巻でギラルドゥスは、征服が一段落した後にヘンリ二世が送りこんだ総督の資質や力量に問題があったと繰り返し主張している。彼の考えでは、総督は、征服に功績があり、アイルランド人勢力の実情をよく知る者が選ばれるべきで、ふさわしい人物が「ジェラルド一族」にいたにもかかわらず、王は征服に関係のない腹心を派遣した。彼らは戦闘・作戦の能力を欠き、不誠実であったから、征服は頓挫し、十分な成果なく終わったというのである。

このようにギラルドゥスは一方で王の政策を批判し、他方で冷遇された「ジェラルド一族」の戦功を褒めたたえている。とすれば、この賛歌は彼の一族に対する強い信頼と帰属意識を表していると考えてよい。実際彼はいろいろな場面でウェールズやアイルランドに

居住する一族を頼りにし、支援を受けている。

では、彼が母から受け継いでいた南ウェールズ王家の人々との関係はどうだったのか。彼の著作を探てみると、政治的目的をもった接触は別として、親しい交わりを示唆する記述は下の(2-6)のみである。教育のためにマノルビエを離れるまでは母とともにウェールズ人支配者の下を訪れる機会があったと思われるが、記憶に残らなかったのであろうか、まったく記されていない。

唯一の手がかりはギラルドゥスとリースの面談の様子を伝える次の記述である。

(2-6) 南ウェールズの君主リース・アップ・グリフィズが王の使者たち、すなわち、カンタベリー大司教ボードウィン(Baldwin)とイングランド王国行政官長ラヌルフ・ド・グランヴィル(Ranulf de Granville)と面談するためにヘレフォードまで出向いたことがある。リースは同地のウィリアム・ド・ヴェール(William de Vere)の家に滞在し、これ以上ない厚遇を受けていた。ギラルドゥスが訪れると、リースは朝食中で、その両側に当地の聖・俗の支配者が座っていた。2人ともクレア(Clare)家の一員だった。

「[[私] ギラルドゥス大助祭は[歓談中の] 彼らに近寄り、テーブルを隔てたところから、リースに向かって大変丁寧に、[しかし] ユーモアを込めて次のように話しかけた。『リース様、あなたは今大きな喜びを感じておられる [でしょうが]、それは当然です。あなたがこの祝いの場で当然のようにクレア家を代表する2人の有力者を両脇に座らせているのは、[実際喜ばしいことなのですから]』と。」私がこう言ったのは、かつてクレア家が支配していたカーディガン(Cardigan)地域をリースが奪回し、本拠地としていたからである⁽³²⁾。

これは1188年にウェールズで行われた十字軍参加勸奨の巡行に先立って、ギラルドゥスがカンタベリー大司教ボードウィンをリースに紹介した後で交わされた雑談の一部である⁽³³⁾。内容から明らかであるが、ギラルドゥスはリースを格上の、尊敬すべき相手と見なしている。また、彼はリースにテーブル越しに話しかけたと特記しているのは、通常ならば自分はこのように親しく会話できる立場ではないと自覚していたからであろう。ギラルドゥスはリースに対して、地位の差もあって、尊敬の念を表明しているが、親族としての親近感はありませんもっていませんかった可能性が高い。

本節の推定をまとめておこう。ギラルドゥスが帰属意識をもっていたのは何よりも自分が生まれ育ったアングロ・ノルマン貴族の家庭であり、成人後は家族を含めた「ジェラルド一族」に深い信頼感を抱いていた。それに対して、系譜上4分の1だけ属していたウェールズ王家にはそれほど親近感をもっておらず、職務上接触することはあっても一定の距離を保ち、いわば用心していた。彼はウェールズ人支配者たちに対して決して敵対的では

なく、その繁栄を願う気持ちももっていただろうが、母のいところであっても、リースの前では安心してくつろぐことはなかった。

以上から、彼は二元的出自を重視し、利用しようとしているが、帰属意識でいえば圧倒的にアングロ・のロマン貴族であったと判断してよいであろう。その意味でギラルドゥスはウェールズ人でなかったのである。

Ⅲ セント・デイヴィズ教会

ギラルドゥスがセント・デイヴィズ教会に強い帰属意識をもっていたことは、彼の生涯を簡潔に振り返るだけでも明らかである⁽³⁴⁾。

まず、彼はセント・デイヴィズ教会に近くのマノルビエで養育され、くわえて、同教会の司教は母方の伯父デイヴィッドであったから、この教会は幼少期よりギラルドゥスにとって最もなじみ深い場所であった。彼は『自叙伝』の中で、子供のころに父がよく自分を「私の司教様 (suum episcopum)」と呼んでいたと記している⁽³⁵⁾。言葉遊びとはいえ、父も子も地元の、しかも、ウェールズ最高の権威と伝統をもつ教会で活躍することを夢見ていた可能性が高い。

第1回パリ留学を終えて帰国したギラルドゥスは教会改革のため尽力する決意をしたと記しているが⁽³⁶⁾、このとき彼が思い浮かべていたのはセント・デイヴィズ司教区であった。聖職者としての活動を始める際に、彼は自分と故郷の教会とのかかわりを改めて確認したのであろう。

まもなくギラルドゥスは、教会改革の功績を認められて、セント・デイヴィズ司教区のブレコン (Brecon) 教会を預かる大助祭の職を得た。それとともに彼はセント・デイヴィズ教会の参事会員となって、この教会の運営に直接携わり、次期司教の有力候補と見なされるまでになった。実際、1176年に司教デイヴィッドが死去すると、彼は筆頭候補として王に推挙されている。同教会のメンバーから信頼を得ていたのである。

彼自身の帰属意識も高く、純粹であった。この点を示す記述を3点『自叙伝』から紹介しよう。

(3-1) 「大助祭であった私は、マニウ教会 (= セント・デイヴィズ教会) が司教不在のため損害を被ることのないように、自分の権限の範囲で [教会を] 守ろうと務めた⁽³⁷⁾。」

これは、上で触れた司教選出の際に筆頭候補だったギラルドゥスがヘンリ二世によって

拒否され、混乱が生じて司教選定が遅れた時の述懐である。王はなぜ自分を避けたのかという疑念もあったと推測されるが、それには触れず、司教不在の教会を自分が支えなければという責任感が表明されている。

(3-2) 第2回パリ留学から帰国すると、ヘンリ二世は私にセント・デイヴィズ教会の混乱を収拾するよう命じた。私ははっきりと教会メンバーの側に立って行動した。

この行動は「私の教会に対する至上の愛と献身の証であった⁽³⁸⁾。」

これは、ギラルドゥスが司教への道を閉ざされて再度パリへ留学し、帰国した時の事件を伝える文章である。当時セント・デイヴィズ教会では新司教ピーター(Peter)と主要な教会メンバーとが対立し、ピーターは司教としての任務を果たせない状況になっていた。ヘンリ二世はこの事態を憂慮し、ギラルドゥ스에 収拾を命じたのである。おそらく彼は王の要請に複雑な思いをもったであろうが、それでも同教会の秩序回復のために、それ以前から教会を支えてきた人々の対場に立って同教会の権威を取り戻す努力を惜しなかった。当然ピーターはギラルドゥスを敵と見なし、両者の間で激しい言葉が交わされたが、結局ギラルドゥスが実質的に教会を管理することで決着がついている⁽³⁹⁾。彼の同教会に対する強い責任感と帰属意識がもたらした成果である。実際、彼はここで「私の教会」と表現している。

1184年にギラルドゥスはヘンリ二世の強い要請を受けて王宮付き司祭となり、94年まで王の命じる任務を忠実に遂行している。職務であれば当然であるが、それだけではなく、彼は自分が王の忠実かつ有能な従者であることを示し、王の誤解、すなわち、ギラルドゥスをセント・デイヴィズ司教に任命するとウェールズ人親族と結託して自分の進めているウェールズ政策を妨げるのではないかという疑念を晴らそうと目論んでいた。しかし、10年に及ぶ尽力にもかかわらず王は疑いを解かなかった。王宮を辞する時に彼は司教への道をひらく何か新しい方策が必要があると考えていた可能性が高い。

彼は新作戦を1198年までにまとめあげていた。実行に移す機会を、具体的には、次の司教選出の機会が来るのを心待ちしていたと思われる。

(3-3) 1198年に司教ピーターが死去したため、セント・デイヴィズ教会はギラルドゥスを次期司教候補に推挙したが、王ジョンにより再度拒否されたことを知って、彼にローマへ行き、教皇の聖別を受けて司教に就任するよう要請した。これを受けて私は「すべての聖職者や世俗の人々が私に対してもっていた願望について熟慮した。というのも、人々の声は神の声である[と考えていた]からである。」……決心が固まると「私はこの教会に往時の状況[=大司教座]と祖国の名誉を取り戻すために迷わず、直ちに全身を投げ出すことにした⁽⁴⁰⁾。」

ここで言及されているローマ訪問は、私が「セント・デイヴィズ問題」と呼んでいるよ

り大きな作戦の一部であり、(3-3)を理解するためには作戦全体について簡単に説明する必要がある⁽⁴¹⁾。

新しい作戦はギラルドゥスが、セント・デイヴィズ教会の主要なメンバーを巻き込んでつくられ、双方の宿願を同時に達成するという目的をもっていた。ひとつはギラルドゥスのセント・デイヴィズ司教就任であり、彼が生涯をかけて追ってきた目標であった。もうひとつはセント・デイヴィズ教会の大司教座権回復であり、これは半世紀ほど前から同教会が何度か提起していた問題であった。この2つを組み合わせることでギラルドゥスと教会の連帯がこれまで以上に明確かつ強固になった。

問題は方法で、この当時までにイングランド王国の司教は王が任命し、カンタベリー大司教が聖別するという慣行ができ上がっていて、ギラルドゥスの場合はこの難関を抜けることができなかった。そこで彼は、カンタベリー大司教よりも上位のローマ教皇から直接聖別を受けることによって目標を達する作戦を立てた。当然のことながら、作戦成就のためには教皇とセント・デイヴィズ教会の支援が不可欠であり、そのために彼は同教会の宿願、大司教座回復というアイディアを取り込んだ。また、彼はこのアイディアが教皇の関心を引くはずと考えていた可能性が高い。聖界と俗界の権力争いに加わっていた教皇インノケンティウス三世にとって、自分の権威でイングランド王国に大司教を任命できるのは大きなメリットになるという計算である。南ウェールズの大助祭としては大胆な計画である。

他方、この作戦には大きなリスクが含まれている。それは、ギラルドゥスがイングランド王と真正面から敵対することになるからである。第2節で紹介したように彼は最終決断の前に兄に秘かに相談をしている。(3-3)にはいわば決死の覚悟を決めた時の様子が記されているのである。当然感情の高ぶりが見られるが、同時に、実質的に唯一の後ろ盾であるセント・デイヴィズ教会に対する期待が強く表明されている。人生をかけた計画を立てる際に彼が頼りにしたのは同教会だったわけで、ここから彼の本源的な帰属意識を読み取ってもよいだろう。

ギラルドゥスはセント・デイヴィズ教会を特別視していて、他の司教職には関心を示さなかった。彼はアイルランド遠征に随行したジョン王子からアイルランドの2つの司教職を提示され、帰国後は南東ウェールズのサンダフ(Llandaff)司教にならないかという誘いを受けたが、いずれも迷わず断わっている⁽⁴²⁾。学問に専念したいという理由であったが、これが断る方便であったことは間違いない。彼が熱望していたのは単なる司教の地位ではなく、故郷セント・デイヴィズ司教職であった。

実際、ギラルドゥスは司教となってセント・デイヴィズ教会で何をなすべきか、明確なイメージないし目的をもっていた。彼は同教会の現状を憂いており、抜本的な改革が必要

であると考えていた。

(3-4)「セント・デイヴィズ〔教会〕は今日でもウェールズ〔聖界〕の中心であるが、かつては大司教座でもあった。しかし、今日では我らが母〔教会〕の古い慣習や権威はすべて〔失われ〕、名ばかりとなっている。」……こうした現状を見るにつけ、私は悲嘆の念を禁じえない⁽⁴³⁾。

彼はどのような点で同教会が衰退していると考えていたのか。上の文章では大司教座権の喪失が強調されているが、彼の念頭にあったのは別の、より実質的な問題、すなわち、教会財産の減少と教会メンバーの学識低下であった。第1回パリ留学後に彼が取り組んだのは前者の問題である。また、後者について彼は、最初に司教に推挙された際、教会メンバーで自分以外に司教にふさわしい学識をもつ者はいないと断言している⁽⁴⁴⁾。自尊心の発露ではあるが、事実を踏まえた発言であろう。これらに比べれば大司教座権の問題は、容易に解決できる見通しが立たないこともあって、少なくとも当初は比較的现实性の低い課題だったと思われる⁽⁴⁵⁾。

史料(3-4)に関してもうひとつ留意すべき点がある。それは、ギラルドゥスがアングロ・ノルマン征服以前のウェールズ再興を願っていたわけではないという点である。征服後の1世紀間で南ウェールズ社会は大きく変わっており、彼はそうした現実をよく知っていた。また、彼は政治的センス豊かなリアリストであり、現実から遊離した計画をもてあそぶ人間ではなかった。彼の考える大司教座再興は12世紀後半の政治的・宗教的状况を前提にして、その上に大司教座教会をつくることであったと考えてよい。前提の中で最も重要だったのはイングランド王権の下で成立したアングロ・ノルマン貴族の支配、およびこれに伴って導入されたローマ教会の組織原理である。前者は彼自身の出自や生活そのものであり、後者は彼が尽力していた南ウェールズの教会改革である。言うまでもなく、いずれも11世紀以前のウェールズ社会を否定するものであった。

1199年夏にギラルドゥスはローマに行き、セント・デイヴィズ教会を代表して教皇インノケンティウス三世に上記の2つの要請をした。(3-3)が言及している新作戰の開始である。教皇はギラルドゥスとセント・デイヴィズ教会の請願をひとまず受け止め、イングランド王権の主張とともに審査をして、裁定を下すことにした。

第1回審査は1200年に教皇庁で行われ、双方から申し立てがなされた。この段階の教皇はギラルドゥスに友好的な態度を示しており、彼に教皇庁の文書庫でセント・デイヴィズ教会の大司教座権を示唆する文書がないか探索を許している。調査の結果は上々で、彼は半世紀前にセント・デイヴィズ司教バーナード(Bernard)が大司教座権復興を求めて教皇に訴え出た際の文書など、自分の主張の裏付けとなしうる資料を発見している。

帰国後も彼はセント・デイヴィズ教会で、司教バーナードが大司教座権を主張して教皇

序へ訴え出た際の資料を調べ、自分の主張を強化ようとしている。彼は、バーナードが主要な論拠としたリギヴァルフ (Rhigyfarch) の『聖デイヴィッド伝 (Vita Daudis)』⁽⁴⁶⁾を知っていただけでなく、これを踏まえて1194年に『セント・デイヴィズ教会大司教聖デイヴィッド伝 (Vita Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi)』を著していたのであるが⁽⁴⁷⁾、さらに細かく次回の教皇審査で利用できる資料を探索したのである。彼は明るい展望をもっていた。

しかし、翌年春に第2回審査が開かれると2つの点で状況がギラルドゥスにとって不利な方向へ変化していることが分かった。ひとつは、カンタベリー大司教の働きかけによってセント・デイヴィズ教会に反ギラルドゥス派が形成され、同教会の代表として教皇の下に派遣されたこと、もうひとつは、教皇が自分を取り巻く政治状況の中で、イングランド王権と対立するのは得策ではないという判断を固めたことである。審査結果に直接影響を与えるのは後者であるが、ギラルドゥスの心境からすれば、前者の打撃のほうが大きかったのではないか。教会メンバーの一致した支持なしでは、彼の主張は個人的なものとなり、何よりも彼の教会に対する信頼が失われたからである。

1203年に下された裁定はギラルドゥスと彼を支持する教会メンバーにとって完全な敗北を意味した。教皇はセント・デイヴィズ教会に対して次期司教候補の選出をやり直すように命じたが、この時期の教会は、少なくとも表面的には、反ギラルドゥス派が多数を占めており、ギラルドゥスが再度推挙される可能性はなかった。また、教皇は大司教座権の復興についてまったく言及せず、結果的にセント・デイヴィズ教会の願いを無視した。

それだけではない。裁定が出される前にギラルドゥスはイングランド王から「王国の権威と平和を乱す⁽⁴⁸⁾」者と宣告され、孤立無援の状況に追い込まれていた。前節で紹介した兄フィリップの危惧が現実のものとなったわけで、もはやセント・デイヴィズ教会の権利を主張するところではない。彼はカンタベリー大司教に許しを請い、宣告解除と引き換えにブレコン大助祭の職を辞した。セント・デイヴィズ教会を司教としてリードする夢は破れ、教会からいわば追放されたのである。

ギラルドゥスはやむなく王の命令にしたがったが、強い不満を抱いていた。彼は『自叙伝』の序文で次のように記している。

(3-5) 私が自叙伝を書こうとしたのは、自分の生涯を簡明な文章で伝えれば後世の人々に役立つと信じているからである。中でも、私が自分の「経験によって知ること、[すなわち]、イタリアとウェールズの2つの教会が金銭の力でいかにたやすく堕落したのか、[その経緯を] 伝え [ようと考えたからである。]」本書を通じて私は、セント・デイヴィズ教会が自らの権威について熟慮するように、また、私の記述から学んで、今後生じるかもしれない同様な問題に備えるように心から願っている

る⁽⁴⁹⁾。

本稿にとって重要なのは「イタリアとウェールズの2つの教会」である。彼はここで一般的な教会批判をしているわけではなく、具体的な教会を念頭に置いていることは間違いないが、私は、『自叙伝』が「セント・デイヴィズ問題」の3年後に書き始められたこと、また、同書の後半部分はこの事件の経緯や史料によって占められていることから判断して、ローマ教皇庁とセント・デイヴィズ教会のことであると推測する。とすれば、ギラルドゥスは長年信頼し、頼りにしていきたセント・デイヴィズ教会に対して、少なくとも教皇の前で偽証し、自分を窮地に追いやったメンバーに対しては許し難い思いを抱いていたと推定できる。ただし、彼は一方的に教会を非難するのではなく、自分の苦い記憶を教会メンバーに伝えるという方法を採用している。ここから彼が、裏切られてもまだ忠告せずにはいられないという同教会に対する思い、その意味で複雑な帰属意識を読み取ることもできるであろう。

IV 郷土ウェールズ

第2、第3節の検討から、ギラルドゥスが生涯を通じて親族とセント・デイヴィズ教会に強い思いと帰属意識をもっていたことは明らかである。

しかし、彼の帰属意識を問題とするのであれば、ウェールズに対して彼がどれだけの愛着心をもっていたのか確かめておく必要がある。というのも、第1節で紹介したように、中世ウェールズを代表する偉人と称されるギラルドゥスはしばしばウェールズ人・社会に対して大変厳しい評価を下しており、自分の国をなぜここまで酷評するのかという疑問が生じるからである⁽⁵⁰⁾。

ギラルドゥスは郷土ウェールズをどう思っていたのか、彼の認識する郷土とはウェールズ全体であるのか、それとも、南西ウェールズに限られていたのか、また、彼は自分をどこまでウェールズ人と認識していたのか、その際彼は自分の2つの出自をそれぞれどれだけ重視していたのか。本節はこうした問題について検討する。

まず、ギラルドゥスが生まれ育った南西ウェールズに強い愛着心をもっていたことは間違いない。

(4-1) 「ウェールズのいろいろな地域の中で、7つの郡をもつダヴェッドが最も美しく、優れている。ダヴェッドの中ではペンブローック地域が「最も魅力的である」。そして、ペンブローックの中では今私が述べた土地「マノルビエ」が卓越している。した

がって、ウェールズ全体の中でこの土地が最も快適な「場所」である。」私がこのように褒めたたえるのは、マノルビエは私の郷土だからである⁽⁵¹⁾。

典型的なお国自慢であるが、ギラルドゥスの正直な気持ちであろう。前節で紹介したように、マノルビエ近くにペンブローック城があり、さらに足を延ばせば、セント・デイヴィズ教会も1日で訪れることができた。この3地点を結ぶ地域、やや広げてウェールズ南西部が彼の生まれ育った所であった。また、彼の聖職者としての仕事はもっぱらセント・デイヴィズ教会と南東部のブレコンで行われたから、南ウェールズに広がるセント・デイヴィズ司教区が彼の活動の場であった。さらに、彼を支援してくれる親族が居住していたのもこの地域である。以上から、ギラルドゥスの郷土は厳密に言えば南西ウェールズ、拡大しても南ウェールズの範囲内にとどまっていたと判断するのが自然であろう。

史料(4-1)で注目したいのは、ギラルドゥスが同様な愛着心をウェールズ全体に示していないという点である。お国自慢がもつ限界なのかもしれないが、彼の頭の中で南ウェールズと他の地域とがはっきり区別されていることは間違いない。

では、ギラルドゥスはウェールズ全体についてどのように言及しているのか。自分とかわらせて述べている事例を紹介しよう。

(4-2) この著作で「私のウェールズ」について紹介し、他の民族と大きく違っているウェールズ人について述べようと思う⁽⁵²⁾。

(4-3) 「私の「居住する」地域」がもっている秘密を完全に解き明かすことができれば、後世の人々に役立つと考えた⁽⁵³⁾。

(4-4) 他の主要な地域は先人たちによって紹介されているが、ウェールズの紹介はこれまでにない。そこで、私は「祖国とその周辺」の歴史を書こうと決心したのである⁽⁵⁴⁾。

(4-5) 私はセント・デイヴィズ教会が往時の状況を取り戻し、「祖国の名誉」を回復するために全力を捧げることにした⁽⁵⁵⁾。

以上4つの表現からどのようなことが言えるであろうか。(4-2)、(4-3)からは、ギラルドゥスがウェールズ全体を自分の国と認識していたように見える。実際、出典である『ウェールズ案内』はウェールズ全体を視野に入れている。しかし、(4-4)でウェールズを「祖国とその周辺」と記していることを考えると、彼にとって祖国とはウェールズの一部、具体的には南西ウェールズ、広げても南ウェールズまでであって、ウェールズ全体ではないと理解するのが自然である。また、(4-5)ではセント・デイヴィズ教会との関連で「祖国の名誉」が言及されており、ここでは同教会の地域、すなわち、セント・デイヴィズ司教区が念頭に置かれていたと考えてよい。

では、ギラルドゥスはなぜ(4-2)や(4-3)で「私のウェールズ」、「私の地域」とい

う表現を用いたのであろうか。これらの文章が『ウェールズ案内』の序文に記されていることを手がかりに推測してみよう。

まず、この著作はウェールズ外の人々、特にイングランド王宮に集う支配者たちに向けて書かれているが、彼らから見ればギラルドゥスは間違いなくウェールズの人であった。実際、王宮の人々は彼を「カンブレンシス」（「ウェールズの」あるいは「ウェールズ人の」）と呼んでおり、これを彼も受け入れていた。彼がそうした読者の認識を踏まえて、ウェールズは自分の国であると表現したことは充分考えられる。次に、彼には自分がウェールズ全体を知っているという自負があり、その点を読者に顕示したかったと思われる。実際、ウェールズの地誌に関する彼の知識は南西部に限定されていない。知識の広がりといえば「私のウェールズ」だったのである。さらに、この著作でギラルドゥスは、自分が王の忠実かつ有能な臣下であることを誇示したいと考えていたが、自分が提供でき、また、王も求めていたのはウェールズ征服に役立つ具体的な情報であった。彼はウェールズ全域について熟知していると言わざるを得ない立場にたって『ウェールズ案内』を構想・執筆している。

このような状況があれば、ギラルドゥスが、自分の帰属認識とは少しずれていることを承知しながら、あえて全ウェールズを自分の国であると称するのも不自然ではないだろう。

他方、彼が自分をウェールズ人とする王宮の認識に不満をもっていたことは、王宮を辞して間もなく書かれた『君主の訓育（De Principis Instructione）』の序文から明らかである。

（4-6）よく統治された地域から悪意に満ちた、手に負えない人が生まれる半面、野蛮な地域から学識豊かな人間が生まれることもある。「国が人を輝かせるのではなく、称賛すべき人が国を輝かせるのである⁽⁵⁶⁾。」

一般論の形をとっているが、ギラルドゥスが念頭に置いているのは自分自身のことである。彼は、自分をウェールズ人と決めつけ、しかも、ウェールズ人はみな能力、学識が劣ると判断するのは不当であり、少なくとも自分には当てはまらないと言っている。また、ここでは出身地による差別が取り上げられているが、要職への起用と結びつけて考えれば、出身地ゆえに自分を拒否する王の判断と重なって来る。（4-6）が彼の苦い経験から生まれた発言であることは間違いない。

以上を踏まえて、ギラルドゥスがどのような帰属意識をもっていたのか、私の理解をまとめてみよう。彼は、南西ウェールズを郷土とするが、出自、活動いずれの面でもまずはアングロ・ノルマン人であると認識していた。実際、彼は征服地に定着したアングロ・ノルマン貴族の二世代目であり、その利害、特に栄達がイングランド王宮の評価によって大きく左右される立場にいた。ただ、彼は郷土を中心としたウェールズについてよく知って

おり、ウェールズ王家の血を部分的に受け継いでいたから、ウェールズに対して強い親近感をもっており、その意味でウェールズの人と自認することができた⁽⁵⁷⁾。ただし、彼が生来、また、活動を通じて保持していた二元性は決して均等なものではなく、アングロ・ノルマン側に大きく偏っていた。

その上で重要なのは、ギラルドゥスは常に上記の帰属意識に即して行動していたわけではないという点である。誰でも自分の帰属意識と矛盾しかねない行動をとることはあるが、彼の場合2つの特徴があり、これが問題を生む原因となった。

第1の特徴は、彼が意識的に2つの出自のバランスを変えて見せたことである。すなわち、彼は目的達成のためならば自分の本来の帰属意識を抑え、あえて相手の意向に合わせたバランスを選んでいる。このように彼が状況に応じてバランスを変えながら採って見せた立場はひとつの政治的スタンスと呼んでよい⁽⁵⁸⁾。

たとえば、王宮付き司祭としてヘンリ二世に仕えた時期には、王の意向に即して、自分がウェールズをよく知り、王のウェールズ政策に役立つ人材であることを誇示する目的でウェールズとの親近性を強調している。ただし、この点を強調するともう一方で自分が訴えたい王への忠誠心が疑われる危険性があり、その点の調整に彼が苦慮したことは上で紹介した。

また、彼が自分の司教任命を拒否した王宮に論争を挑み、セント・デイヴィズ教会の支持をぜひとも確保する必要に迫られた時には、同教会を支えるひとつの力であったウェールズ人支配者たちに支持を求めているが、そこでの彼は自分をウェールズ人であり、彼らの味方であるとアピールしている⁽⁵⁹⁾。

ギラルドゥスの第2の特徴は、彼が自分の行動を細かく書き残していることである。彼の筆力もあって、読者は記述を素直に理解しがちであるが、そのように読むと、彼はイングランド側とウェールズ側とを渡り歩いているように見えてしまう。さらに、このスタンスの変更を彼のアイデンティティを直接結びつけると、ギラルドゥスには確固としたアイデンティティがなかったのではないかという疑いすら生じる。本稿のこれまでの議論から、こうした理解が誤っていることは明らかであろう。政治的スタンスと帰属意識とを区別して検討する必要がある。

最終的な結果を知っている今日の読者が惑わされるのであれば、同時代の人々がギラルドゥスのスタンスの変化に疑いをもち、彼に不信感を募らせたのも当然であろう。これは、自分が招いた結果であり、彼も充分感じ取っていた。実際、彼は次のように述べている。

(4-7)「私はアングロ〔・ノルマン〕人の間で養育され、〔彼らと〕付き合ってきたこと、また、私の生れ〔がウェールズで〕、親族もウェールズにいたこと、この〔2つの事実〕から〔アングロ・ノルマン人とウェールズ人の〕どちらも一致して私を他

国の人で、自分たちとは違う人間であるとみなした。いつも継母のような目で「私を」眺め、一方は「アングロ・ノルマン人の親族ゆえに」私に疑いをもち、他方は「ウェールズ生まれゆえに」私を強く憎んだ⁽⁶⁰⁾。」

これも『君主の訓育』の序文に含まれる文章で、「セント・デイヴィズ問題」を提起する前のギラルドゥスの心境を伝えている可能性が高い⁽⁶¹⁾。成人後一貫して出自の二元性をメリットと考え、利用してきた彼が、ここではそのデメリットに直面して困惑している。状況に応じて選び、変えてきたスタンスのつけが、十数年をへて誰にも信頼されないという苦境となって回ってきたのである。

V おわりに

前節で私は、ギラルドゥスの行動を理解する際に彼の帰属性とともに、場合によってはそれ以上に、彼がその時々にとって見せた政治的スタンスを把握しておくことが重要であると指摘した。この判断は先行するいくつかの拙稿を踏まえて得られたものである⁽⁶²⁾。

そこで本稿の締めくくりとして、先行拙稿および本稿の結論を組み合わせ、ギラルドゥスが生涯の各時期に自分の3つの帰属性をどのように組み合わせているのか、また、帰属性と政治的スタンスとの関係をどのように調整しているのか整理しておこう。

- (1) 生誕から養育の時期のギラルドゥスにとって、親族とセント・デイヴィズ教会は生まれつきの帰属先であり、両者の所在地南西ウェールズが生活の場であった。この時期の彼にとって政治的スタンスは無縁であり、帰属意識もそれとして生まれていなかった。出自とそれがもたらす環境をそのまま受け入れ、享受していたのである。
- (2) 郷土を離れてグロスターやパリで学ぶ中で、ギラルドゥスは民族的にも文化的にも自分と違った人々に接し、初めて自分の帰属性について考える機会を得た。第1回パリ留学から帰国した時に彼は自分の「祖国 (patria)」のために尽力すると決意しており、留学中に明確な帰属意識が形成されていたことが分かる。ただし、この「祖国」は、前節で明らかにしたように、南西ウェールズないしセント・デイヴィズ司教区のことであり、目的は司教となって同教会をリードすることであった。彼の3つの帰属意識がこの時期までにでき上っていた。
- (3) 帰国したギラルドゥスは、カンタベリー大司教の許可を得てセント・デイヴィズ教会の権限や収入源を取り戻す作業に取り組み、成果を挙げた。彼は自分の作業が教会内・外で評価され、昇進につながると信じていた。司教候補を選ぶのが同教会であり、

選任と聖別はそれぞれ王と大司教の権限であると知っていたからである。

この時期のギラルドゥスは3つの帰属先の中でセント・デイヴィズ教会を最も重視していたが、それだけでなく、帰属先ではない王宮へも配慮しなければならなかった。ただ、教会改革は両者に利益をもたらしたから、彼は特別の政治的スタンスを顯示する必要もなく、安心して改革に力を注ぐことができた。

- (4) しかし、この幸せな状況はまもなく崩れた。司教デイヴィッドの死去により、次期セント・デイヴィズ司教の選定が進められる中で、ヘンリ二世が最有力候補として推挙されたギラルドゥスの任命を拒否し、その理由として、南ウェールズ王家の系譜を引く者に司教職を与えると、ウェールズ人支配者たちと結託する危険が高いと述べたのである。ギラルドゥスから見れば王の発言はまったくの誤解であったが、表だった反論はできず、また、司教昇進の夢を断念するつもりもなかった。

- (5) そこで、彼は第2回パリ留学中に熟慮して、自分がいかに王に忠実であるか、機会を見つけてアピールする作戦を立てた。その機会は留学から帰国後しばらくして与えられた。王が彼を王宮付き司祭に任命し、その人脈や知識をウェールズ政策に役立てようとしたのである。ギラルドゥスはこれを、親族と故郷ウェールズという2つの帰属先を利用して、王に対する忠誠心を示す絶好の場と考えた。

彼は王の意向に沿って王宮とウェールズ人支配者たちとの仲介役を務め、その際王宮のイメージに合わせた自分を演出した。すなわち、彼は自分をアングロ・ノルマン貴族の一員と認識していたにもかかわらず、王宮ではあえてウェールズ人として振る舞うという選択をしたのである。このねじれた状況は彼に大きなストレスを与えることになったが、それだけではなく、王宮内・外の人々が彼に不信感をもつきっかけとなった。彼はイングランド、ウェールズどちらの側に立っているのかと疑われるようになり、長い目で見ればこの信頼喪失が彼の生涯に大きな打撃を与えた。

- (6) しかも、この政治的演出は、ヘンリ二世が彼の功績に報いることなく死去するとはば意味を失った。訴えかける相手がいなくなり、後継の王たちを彼はあまり信頼していなかったからである。実際、1198年にセント・デイヴィズ司教の選出が始まり、彼が筆頭候補に推された時に、時の王ジョンは彼を最終的に拒否している。

ギラルドゥスはこうした結果を予測していたようで、すぐに数年前から温めていた新しい作戦を実行に移した。一方でセント・デイヴィズ教会全体の支持を固め、他方で、ローマ教皇に訴え出て、その聖別によって司教に就任するという作戦である。後者は司教任命権を重視していたイングランド王宮に対する挑戦を意味したから、彼は王宮、特にカンタベリー大司教と正面から対立し、教皇庁で激しい論戦が行われた。

当然のことながら、この作戦によって彼の帰属先と政治的スタンスをめぐる状況が

大きく変った。彼が頼りにしたのは、教皇は別として、セント・デイヴィズ教会とその背後にいたウェールズ人勢力だったからである。帰属先でいえば、同教会の比重が非常に大きくなり、イングランド王の家臣であった親族の支援は期待できなくなった。史料(2-4)で紹介した兄フィリップの助言は、言外に自分たちの支援を期待しないようにと伝えている。また、政治的スタンスは王への恭順から敵対へと逆転している。王宮は彼のスタンス変更に驚き、一気に不信感を強めたのではないか。他方、ウェールズ人勢力は彼が期待したほどの動きを見せなかった。系譜はつながっている、彼を王を敵に回してまで守るべき身内と見なしていなかったのであろう。

- (7) 彼に残されたのはセント・デイヴィズ教会の一致した支持だけだったが、これも間もなく崩れていった。カンタベリー大司教の工作で教会内が割れ、大司教側のメンバーが教会を代表するようになったからである。彼は孤立無援となり、完全に敗北した。3つの帰属先のうちで親族とセント・デイヴィズ教会を失い、郷土南ウェールズにとどまることもできなかった。ギラルドゥスにとって生涯最大の挫折であった。

註

第1節

- (1) ギラルドゥス自身がこの通称を使っていた可能性がある。[82] Wada, p. 252.
- (2) 『ウェールズ旅行記』 [3] Giraldus. [25] Giraldus (Thorpe (trans.)).
- (3) 『ウェールズ案内』 [4] Giraldus. [27] Giraldus (Thorpe (trans.)).
- (4) [97] 永井。[99] 永井。[103] 永井。[104] 永井。[105] 永井。[106] 永井。
- (5) [4] Giraldus, p. 218. [27] Giraldus (Thorpe (trans.)), p. 267.
- (6) [4] Giraldus, pp. 222~23. [27] Giraldus (Thorpe (trans.)), p. 271.
- (7) [4] Giraldus, p. 225. n. 4 [27] Giraldus (Thorpe (trans.)), pp. 51~52.
- (8) [4] Giraldus, p. 226. [27] Giraldus (Thorpe (trans.)), p. 273.
- (9) [4] Giraldus, p. 226. [27] Giraldus (Thorpe (trans.)), pp. 273~74.
- (10) [97] 永井。[99] 永井。[103] 永井。[104] 永井。[105] 永井。[106] 永井。
- (11) [1] Giraldus. [22] ギラルドゥス (有光 (訳))。
- (12) [2] Giraldus. [16] Giraldus (Scott & Martin (ed., trans.)).
- (13) [103] 永井。[104] 永井。[105] 永井。[106] 永井。
- (14) [99] 永井。
- (15) [100] 永井。[101] 永井。[102] 永井。
- (16) Bartlett は最新の著作で、ギラルドゥスが王宮を辞したのは1194年ではなく、1191年であったと推定している。[17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. xv~xvi.
- (17) もうひとつの華々しい時期は、彼が教皇の面前でイングランド王権と対峙し、セント・デイヴィズ教会の大司教座権を主張した1199年から1203年の間である。[101] 永井。
- (18) [103] 永井。[104] 永井。[105] 永井。[106] 永井。
- (19) [7] Giraldus. [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)).
- (20) [5] Giraldus. [28] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)). [29] Giraldus (Butler & Gillingham (eds., trans.)).

- (21) 以下の著作の完成年はバートレットの判断に従っている。[32] Bartlett, pp. 213~19, [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. xv~xvi.

第2節

- (22) [101] 永井, 第2節。

- (23) ギラルドゥスは3人兄弟であったと記していることもある。[101] 永井, 第2節。

- (24) [5] Giraldus, p. 21. [28] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), p. 2. [29] Giraldus (Butler & Gillingham (ed., trans.)), p. 35.

Giraldus . . . ingenuis notalibus prosapiam duxit. Ex matre namque Angarath, filia Netae, nobilis filiae Resi principis Sudwalliae, de filli Theodor, viro egregio Willelmo de Barri matrimonialiter copulato, processit.

- (25) [3] Giraldus, p. 66. [25] Giraldus (Thorpe (trans.)), p. 125.

. . . vir nobiles maritimarum australis Kambriae partim, . . . a Barri scilicet promo agnomen, postea cognomen de Barri suscipientes.

- (26) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)) pp. 4, 5.

Vnde et quoniam inter Anglos, . . . , nostra tam morum institution fuerant quam conversation,

- (27) 彼がウェールズ語を自由に話せなかったこともこの推定の裏付けになるかもしれない。[82] Wada, pp. 237~41.

- (28) [5] Giraldus, pp. 26~27. [28] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), p. 7. [29] Giraldus (Butler & Gillingham (ed., trans.)), p. 42.

- (29) [5] Giraldus, pp. 115~16. [28] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), p. 100. [29] Giraldus (Butler & Gillingham (ed., trans.)), p. 161.

His ita dispositis, accedens ad fratrem suum virum probum et discretum Philippum de Barri, viamque suam et vioe causam, . . . secretius eidem aperiens, verba huiusmodi ab ipso et monita suscepit:

“Arduum est negotium quod, frater, aggredieris et laboriosum, sumptuosum quoque nimis et periculosum: quia non solum contra archiepiscopum Cantuariensem sed etim cntra regem et Angliam totam esse videtur.”

- (30) [16] Giraldus (Scott & Martin (ed., trans.)), pp. 168~71.

Qui sunt, qui penetrant hostis penetralia? Giralddide.

Qui sunt, qui patroam conserant? Giralddide.

Qui sunt, quos hostes formidant? Giralddide.

- (31) [105] 永井, 第6節。

- (32) [5] Giraldus, pp. 57~58. [28] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), pp. 38~39. [29] Giraldus (Butler & Gillingham (ed., trans.)), p. 82.

. . . . accedens Giraldus archidiaconus et stans coram ipsis, mensa tantum interposite, Resum in hoc verba satis curialiter et facete convenit: . . . “Gaudere potes, O Rese, et laetus existere: quod inter duos Clarenses, quorum haereditatem tenes, et de majoribus duos, in hoc prandio sedes.”

- (33) ギラルドゥスはリースをカンタベリー大司教ボードウィンを引き合わせたのはいつなのか記していない。しかし、ボードウィンが大司教に就任したのは1184年で、ラヌルフが行政長官だったのは1180年から89年の間であるから、この面談が1184年から89年の間に行われたことは間違いない。

そして、この間に2人の高官がウェールズを訪れたのは1188年春に行われた十字軍勸奨の巡行の時だけと推定できる。

第3節

(34) ギラルドゥスの生涯に関する本節の説明は次の拙稿を基にしている。[100] 永井。[101] 永井。

[102] 永井。

(35) [5] Giraldus, p. 22. [28] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), p. 2 [29] Giraldus (Butler & Gillingham (ed., trans.)), p. 35.

・ ・ ・ suum episcopum vocare consuevit.

(36) [5] Giraldus, pp. 23~24. [28] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), pp. 4~5. [29] Giraldus (Butler & Gillingham (ed., trans.)), pp. 38~39.

(37) [5] Giraldus, p. 39. [28] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), p. 17. [29] Giraldus (Butler & Gillingham (ed., trans.)), p. 56.

Archidiaconus autem e diverso ne Menevensis ecclesia propter episcopi defectum in sua jurisdictione laesionem incurrent.

(38) [5] Giraldus, p. 55. [28] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), pp. 35~36. [29] Giraldus (Butler & Gillingham (ed., trans.)), p. 75.

Argumentum dilectionis et devotionis, quam erga ecclesiam suam habuit maxime ・ ・ ・ ・ .

(39) [100] 永井, 第3節。

(40) [5] Giraldus, p. 112. [28] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), pp. 95~96. [29] Giraldus (Butler & Gillingham (ed., trans.)), pp. 156~57.

Considerans quoque cleri totius ac populi vota communiter in ipsum concurrentia; attendens etiam, quia vox populi vox Dei. ・ ・ ・ ・ ut ad reformandum ecclesiae suae statim pristum patriaeque totius honorem ・ ・ ・ ・ se totium indubitanter et incunctanter applicaret.

(41) 「セント・デイヴィズ問題」に関する以下の説明については, [101] 永井, 第4, 第5節を参照。

(42) [5] Giraldus, p. 87. [28] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), p. 70. [29] Giraldus (Butler & Gillingham (ed., trans.)), pp. 121~22.

(43) [3] Giraldus, p. 101. [25] Giraldus (Thorpe (trans.)), pp. 159~60.

Quoniam igitur caput est Kambriae Menevia, et urbs olim metropolitana, quanquam hodie plus nominis habens quam omnis, antiquae tamen et authenticae matris nostrae ・ ・ ・ ・ .

(44) [5] Giraldus, p. 42. [28] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), p. 20. [29] Giraldus (Butler & Gillingham (ed., trans.)), p. 59.

(45) ギラルドゥスは『ウェールズ旅行記』の第1版で、イングランド王国ないし社会の大変動でもないかぎり、セント・デイヴィズ教会がかつての権利を取り戻すことは極めて困難であろうと述べている。

[106] 永井, 第4節。

(46) [30] Rhigyfarch.

(47) [11] Giraldus.

(48) [71] Richter, pp. 123, 133.

Dignitatis reginae et pacis regni perturbat.

(49) [5] Giraldus, p. 19. [28] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), p. 1. [29] Giraldus (Butler & Gillingham (ed., trans.)), p. 33.

Quatinus non in pauco sed plurima operis hujus diffundantur utilia, in laudabilem actionem, et actionis aemulatoinem, in fidei duplicis ecclesiae videlicet tam Italiae quam Walensicae per experi-

menta cognationem, et facillimam utriusque aere operante corruptionem.

第4節

(50) [97] 永井, 第3, 第4節。

(51) [3] Giraldus, p. 93. [25] Giraldus (Thorpe (trans.)), pp. 151.

Terrarum igitur omnium Kambriae totius, septem cantaredis conserta Demetia tam pulcherri-
mo est quam patissima; Demetia vero Pembrochia; Pembrochia quidem, terra praescripta. Re-
stat igitur ut Kambriae totius locus est sit hic amoenissimus.

(52) [4] Giraldus, p. 155. [27] Giraldus (Thorpe (trans.)), p. 211.

Kambriae nostrae.

(53) [4] Giraldus, p. 157. [27] Giraldus (Thorpe (trans.)), p. 212.

finis nostrae.

(54) [4] Giraldus, p. 161. [27] Giraldus (Thorpe (trans.)), p. 214.

patraim, patriaeque vicinas.

(55) [5] Giraldus, p. 112. [28] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), p. 96. [29] Giraldus (Butler
& Gillingham (ed., trans.)), p. 157.

patriaeque totius honorem.

(56) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 4~5.

・ ・ ・ ・ nan tam locus personarum, quam persona laudabiles locum illustrat.

(57) マースデンは、ギラルドゥスがイギリス人と自認しながら、ウェールズを郷土と見なしていたのか
もしれないと述べている。[59] Marsden, p. 317.

(58) 和田氏は、ギラルドゥスがパトロンや読者、さらには自分自身のためによいと考えたイメージをつ
くり、その結果彼のアイデンティティは時雄状況に応じて変化した、と述べている。また、マースデ
ンは、ギラルドゥスが生涯の中で状況に応じてイングランドとウェールズに対する姿勢を変えていっ
た、と述べている。[82] Wada, p. 246. [59] Marsden, p. 318.

(59) [101] 永井, 第9節。

(60) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 4~5.

Vnde et quoniam inter Anglos, ut diximus, nostra tam morum institutio fuerat quam conuersa-
tio, in Kambria uero natio reperta est et cognatio, compactum est ex his et confectum, ut
uterque populus me sibi tamquam alieum reputans et non suum, simper oculo respexerit nouer-
cali, alter ob hec suspectum habens et alter exosum.

(61) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), p. xxii.

第5節

(62) [104] 永井, 第5節。[105] 永井, 第6, 第7節。[106] 永井, 第3節。

参考文献

I 史料

(A) ギラルドゥスの著作と訳本

[1] Giraldus Cambrensis: Topographia Hibernica (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi
Cambernsis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867) (『アイルランド地誌』)

[2] Giraldus Cambrensis: Expugnatio Hibernica (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cam-
brensis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867) (『アイルランド征服』)

- [3] Giraldus Cambrensis: Itinerarium Kambriae (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1868) (『ウェールズ旅行記』)
- [4] Giraldus Cambrensis: Descriptio Kambriae (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1868) (『ウェールズ案内』)
- [5] Giraldus Cambrensis: De Rebus a se Gestis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 1, H. M. S. O., 1861.) (『自叙伝』)
- [6] Giraldus Cambrensis: Gemma Ecclesiastica (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 2, H. M. S. O. 1862)
- [7] Giraldus Cambrensis: De Principis Instructione (in Warner, George F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 8, H. M. S. O. 1891) (『君主の訓育』)
- [8] Giraldus Cambrensis: Symbolum Electorum (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 1, H. M. S. O., 1861)
- [9] Giraldus Cambrensis: Speculum Ecclesiae (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873)
- [10] Giraldus Cambrensis: De Jure et Statu Menevensis Ecclesiae, Dialogus (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 3, H. M. S. O. 1863) (『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』)
- [11] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis* vol. 3, H. M. S. O., 1863.) (『セント・デイヴィズ教会大司教聖デイヴィッド伝』)
- [12] Giraldus Cambrensis: De Vita Galfredi Archiepiscopi Eboracensis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873.) (『ヨーク大司教ジョfrey伝』)
- [13] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Ethelberti (in [8] Giraldus Cambrensis: Symbolum Electorum)
- [14] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Remigii (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 7, H. M. S. O., 1877)
- [15] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Hugonis (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 7, H. M. S. O., 1877)
- [16] Giraldus Cambrensis, (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed., trans.)): *Expugnatio Hibernica, The Conquest of Ireland*, Royal Irish Academy, 1978. (『アイルランド征服』)
- [17] Giraldus Cambrensis (Bartlett, Robert (ed., trans.)): *Instruction for a Ruler, De Principis Instructione*, Clarendon press, 2018. (『君主の訓育』)
- [18] Giraldus Cambrensis (Davies, W. S. (ed.)): De Invectionibus/The Book of Invectives of Giraldus Cambrensis, *Y Cymmrodor*, vol. xxx, 1920. (『論駁』)
- [19] Giraldus Cambrensis (Lefevre, Y. & Huygens, R. B. C. (eds., trans.)): *Speculum Duorum, or a Mirror of Two Men*, University of Wales Press, 1974. (『二人の鏡』)
- [20] Giraldus Cambrensis: Topography of Ireland (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*), H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド地誌』)
- [21] Gerald of Wales, (O'Meara, John (trans.)): *The History and Topography of Ireland*, Penguin Books, 1951. (『アイルランド地誌』)
- [22] ギラルドゥス・カンブレンシス, (有光秀一訳): 『アイルランド地誌』, 青土社, 1996年。
- [23] Giraldus Cambrensis: The Vaticinal History of the Conquest of Ireland (in Wright, Thomas

- (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863. (『アイランド征服』)
- [24] Giraldus Cambrensis: The Itinerary through Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863) (『ウェールズ旅行記』)
- [25] Giraldus Cambrensis: The Journey through Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978. (『ウェールズ旅行記』)
- [26] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863) (『ウェールズ案内』)
- [27] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978. (『ウェールズ案内』)
- [28] Giraldus Cambrensis (Rutherford, Anne (ed., trans.)): “*I, Giraldus*”, *The Autobiography of Giraldus Cambrensis (1145~1223)*, Rhwymbooks, 2002. (『自叙伝』)
- [29] Giraldus Cambrensis (Butler, H. E. & Gillingham, John (eds., trans.)): The Autobiography of Gerald of Wales, The Boydell Press, 2005, (orig. 1937)
- [30] Rhigyfarch (James, J. W. (ed., trans.)): Rhigyfarch’s Life of St. David, University of Wales Press, 1967.

II 研究文献

- [31] Babcock, Robert Sherburne: Rule and Society in South-West Wales, 1079~1197, 1992, Doctorial Dissertation submitted to University of California, Santa Barbara.
- [32] Bartlett, Robert: *Gerald of Wales, 1146~1223*, Clarendon Press, 1982.
- [33] Bartlett, Robert: Heartland and Border, the Mental and Physical Geography of Medieval Europe (in [66])
- [34] Brooke, Christopher N. L. : The Archbishops of St. David’s, Llandaff and Caerleon on Usk. (in [35])
- [35] Brooke, Christopher N. L. : *The Church and the Welsh Border in the Central Middle Ages*, The Boydell Press, 1986.
- [36] Charles-Edwards, T. M. : Seven Bishop-Houses of Dyfed, *Bulletin of the Board of Celtic Studies*, vol. 24-2, 1971.
- [37] Clarke, Henry William: *A History of the Church of Wales*, Swan Sonnenschein, 1896.
- [38] Davies, J. Conway: Giraldus Cambrensis and Powys, *Montgomeryshire Collections*, vol. 49, 1945/46.
- [39] Davies, J. Reuben: Aspects of Church Reform in Wales, c. 1093~c. 1223, *Anglo-Norman Studies*, vol. 30, 2007.
- [40] Davies, R. R. : *Conquest, Coexistence, and Change. Wales 1063~1415*, University of Wales Press, 1987.
- [41] De Hirsch-Davies, John Edwin: *A Popular History of the Church in Wales, from the Beginning to the Present Day*, Isaac Pitman, 1912.
- [42] Edmonds, Alfred George: *Landmarks in the History of the Welsh Church*, John Murray, 1912.
- [43] Edward, Fiona & Russell, Paul (eds.): *Tome, Studies in Medieval Celtic History and Law*,

- in honour of Thomas Charles-Edwards*, Boydell Press, 2011.
- [44] Evans, H. Wyn: The Bishops of St. David's from Bernard to Bec. (in [86])
- [45] Evans, J. Wyn & Wooding, Jonathan M. (eds.): *St. David of Wales, Cult, Church and Nation*, Boydell Press, 2007.
- [46] Evans, J. Wyn: Transition and Survival, St. David and St. David's Cathedral. (in [45])
- [47] Henley, George & McMullen, A. Joseph (eds.): *Gerald of Wales, New Perspectives on a Medieval Writer and Critic*, University of Wales Press, 2018.
- [48] Henley, George & McMullen, A. Joseph: Gerald of Wales, Interpretation and Innovation in Medieval Britain. (in [47])
- [49] Holmes, Urban T.: The Kambriae Descriptio of Gerald the Welshman, *Medievalia et Humanistica*, new series, vol. I, 1970.
- [50] Hughes, Herbert: Giraldus de Barri: An Early Ambassador for Wales, *Brycheihiog*, vol. XXXVIII, 2006.
- [51] Hurlock, Kathryn: *Wales and the Crusades, c 1095~1291*, University of Wales Press, 2011.
- [52] Isaac, G. R.: The Cult of St. David. (in [45]).
- [53] Jones, Thomas: *Gerallt Gymro, Gerald The Welshman*, University of Wales Press, 1947.
- [54] Jones, Thomas: Gerald the Welshman's "Itinerary through Wales" and "Description of Wales", *The National Library of Wales Journal*, vol. VI, no. 3, 1950.
- [55] Kightly, Charles: *A Mirror of Medieval Wales, Gerald of Wales and his Journey of 1188*. Cadw, 1988. (和訳書 [94])
- [56] King, David & Kenyon, John: The Castles of Pembrokeshire. (in [86]).
- [57] Lieberman, Max: *The March of Wales, 1067~1300, A Borderland of Medieval Britain*, University of Wales Press, 2008.
- [58] Lloyd, John Edward: *A History of Wales, from the Earliest Times to the Edwardian Conquest*, 2 vols., Longmans, Green, 1912.
- [59] Marsden, Richard: Gerald of Wales and Competing Interpretations of the Welsh Middle Ages, c. 1860~1910. *The Welsh History Review*, vol. 25, no. 3, 2011.
- [60] Miles, John: *Gerald of Wales, Giraldus Cambrensis*, Gomer Press, 1974.
- [61] Newell, E. J.: *A History of the Welsh Church to the Dissolution of the Monasteries*, Elliot Stock, 1895.
- [62] Owen, Henry: *Gerald the Welshman*, David Nutt, 1904.
- [63] Owen, W. Jones & Walker, David (eds.): *Links with the Past, Swansea and Brecon Historical Essays*, Christopher Davies, 1974.
- [64] Pitts, David: *The Early Medieval Church in Wales*, History Press, 2009.
- [65] Pryce, Huw: In Search of Medieval Society: Deheubarth in the Writings of Gerald of Wales, *The Welsh History Review*, vol. 13, no. 3, 1987.
- [66] Pryce, H. & Watts, J. (eds.): *Power and Identity in the Middle Ages, Essays in Memory of Rees Davies*, Oxford University Press, 2007.
- [67] Pryce, Huw: Gerald of Wales and the Descriptio Kambriae. (in [43])
- [68] Rees, J. F.: *Studies in Welsh History, Collected Papers, Lectures, and Reviews*, University of Wales Press, 1965.
- [69] Rees, William: *An Historical Atlas of Wales from Early to Modern Times*, Faber & Faber, 1959.

- [70] Rhys, John & Brynmor-Jones, David: *The Welsh People, Chapters on their Origin, History and Laws, Language, Literature and Characteristics*, Haskell House Publishers, 1906.
- [71] Richter, Michael: *Giraldus Cambrensis, the Growth of the Welsh Nation*, Aberystwyth, 1972.
- [72] Richter, Michael: Gerald of Wales: A Reassessment on the 750 th Anniversary of his Death, *Traditio*, vol. 29, 1973.
- [73] Rooney, Catherine: The Early Manuscripts of Gerald of Wales. (in [47])
- [74] Sharpe, Richard: What Text is Rhigyfarch's Life of St. David? (in [45])
- [75] Sharpe, Richard & Davies, John Reuben: Rhigyfarch's Life of St. David. (in [45])
- [76] Skinner, Patricia (ed.): *The Welsh and the Medieval World, Travel, Migration and Exile*. University of Wales Press, 2048.
- [77] Stephenson, David: *Medieval Powys, Kingdom, Principality and Lordships, 1132~1293*, Boydell Press, 2016.
- [78] Stephens, Meic (ed.): *The New Companion to the Literature of Wales*, University of Wales Press, 1988.
- [79] Tupper, Frederick: *Gerald of Wales, a Medieval Egoist*, Sagwan Press. (orig. The Sewanee Review, 1912)
- [80] Turvey, Roger: *The Lord Rhys, Prince of Deheubarth*, Gomer, 1997.
- [81] Turvey, Roger: *The Welsh Princes, 1063~1283*, Longman, 2002.
- [82] Wada, Yoko: Gerald on Gerald, Self-Presentaion by Giraldus Cambrensis, *Anglo-Norman Studies*, vol. 20, 1998.
- [83] Walker, David: Gerald of Wales, Archdeacon of Brecon. (in [63])
- [84] Walker, David (ed.): *A History of the Church in Wales*, Church in Wales Publications, 1976. (和訳書 [93])
- [85] Walker, David: Gerald of Wales, *Brycheiniog*, vol. XVIII, 1978-79.
- [86] Walker, R. F. (ed.): *Pembrokeshire County History*, vol. II, Pembrokeshire Historical Society, 2002.
- [87] Walker, R. F. : The Earls of Pembroke, 1138~1379. (in [86])
- [88] Williams, A. H. : *An Intoroduction to the History of Wales*, 2 vols., University of Wales Press, 1941 & 1948.
- [89] Williams, C. H. : Giraldus Cambrensis and Wales, *Journal of the Historical society of the Church in Wales*, no. 2, 1947.
- [90] Williams, Glanmor: The Tradition of St. David's in Wales. (in [63])
- [91] Wooding, Jonathan M. : The Figure of David. (in [45])
- [92] 有光秀行『中世ブリテン諸島史－ネイション意識の諸相』刀水書房, 2013 年。
- [93] D. ウォーカー (編) (木下智雄 (訳))『ウェールズ教会史』, 教文館, 2009 年。
- [94] C. カイトリー (和田葉子 (訳))『中世ウェールズをゆく－ジェラルド・オヴ・ウェールズ 1188 年の旅』, 関西大学出版部, 1999 年。
- [95] 永井一郎「ノルマン侵入後のウェールズ－独立をかけた戦い」(青山吉信 編著『世界歴史大系 イギリス史 I 先史～中世』, 山川出版社, 1991 年)。
- [96] 永井一郎「『父祖の土地』－初期中世ウェールズの土地認識」,『国学院経済学』第 441 号, 1995 年。
- [97] 永井一郎「『ウェールズ案内』におけるギラルドゥス・カンブレンシスの二元性」,『国学院経済

学』第57巻3・4号, 2009年。

[98] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスと12世紀南ウェールズの政治世界 (I), (II)」『国学院経済学』第59巻1号, 2010年, 第59巻2号, 2011年。

[99] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスの自己認識とウェールズ評価 (I), (II)」

『国学院経済学』第59巻3・4号, 2011年, 第60巻2号, 2012年。

[100] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスのキャリア・デザイン (I), (II)」『国学院経済学』第62巻2号, 2014年。第62巻3号, 2014年。

[101] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスとセント・デイヴィズ問題 (I), (II), (III)」『国学院経済学』第63巻1号, 2014年, 第63巻3・4号, 2015年, 第64巻1号, 2015年。

[102] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスと『ブレコン大助祭問題』 (I), (II)」『国学院経済学』第64巻2号, 2015年, 第64巻3号, 2016年。

[103] 永井一郎「『ウェールズ案内』を読み直すー著者ギラルドゥスの執筆意図を手がかりに (I), (II)」『国学院経済学』第65巻1号, 2016年, 第65巻2号, 2017年。

[104] 永井一郎「『アイルランド地誌』を読むーギラルドゥス・カンブレンシスの執筆意図にかかわらせて」『国学院経済学』第66巻2号, 2017年。

[105] 永井一郎「『アイルランド征服』を読むーギラルドゥス・カンブレンシスの執筆意図とかかわらせて (I), (II)」『国学院経済学』第67巻1号, 2018年, 2号, 2019年。

[106] 永井一郎「『ウェールズ旅行記』に見られるギラルドゥス・カンブレンシスの政治的スタンス」『国学院経済学』第68巻1号, 2019年。

ギラルドゥスの系譜



